

## 報告

## 山口大学における教学 IR データを活用した FD の実践と評価

藤本正己・岩野摩耶

山口大学教育・学生支援機構教学マネジメント室

要約：本稿では、山口大学において実施した教学 IR データを活用した FD 研修会について、実践内容とその評価を報告する。FD 研修会では、教学 IR データとして「学修実態に関するアンケート」を単純集計やクロス集計した内容を説明した。参加者に対して実施したアンケートの結果を分析したところ、成果としては、FD 研修会の満足度が高いこと、授業改善への活用が促していること、学生支援への改善に活用できていることが分かった。一方、課題としては、FD 研修会の内容の見直しの必要性や各学部根付いた FD 研修会の必要性が分かった。いくつかの課題は残るものの、教学 IR データを活用した FD 研修会を実施することは、教職員に当事者意識を持ってもらう有効な手段のひとつであることが示唆された。

(キーワード：FD (Faculty Development), 教学 IR (Institutional Research), 教育改善, データ活用, 学生アンケート)

## A Practical Approach and Evaluation of Faculty Development Using Educational Data at Yamaguchi University

Masami FUJIMOTO・Maya IWANO

Organization for Education and Student Affairs, Office for Teaching and Learning Management, Yamaguchi University

Abstract: This paper reports on the practical content and evaluation of the FD session conducted at Yamaguchi University using educational data. At the FD session, the "Current student survey questionnaire" for current students was utilized as educational data. The results of the "Current student survey questionnaire" were explained using simple and cross tabulations. According to the questionnaire answered by the participants of the FD session, it was found that the participants were highly satisfied, and that they encouraged using the results to improve teaching and student support. On the other hand, as issues, the necessity of improving the contents of FD session and the necessity of FD session that are rooted in each faculty were found to be importance. Although some issues remain, the results suggest that conducting FD session using educational data is an effective way to make faculty members more aware of the importance of their own activities.

(Keywords: Faculty Development, Institutional Research, education improvement, educational data application, student survey)

### 1. はじめに

文部科学省中央教育審議会は 2020 年 1 月に「教学マネジメント指針」<sup>1)</sup>を取りまとめた。それを受けて、大学教育においては、供給者目線から学修者目線への転換が求められるようになった。教学マネジメント指針では、教学マネジメントを支える基盤として「FD (Faculty Development)・SD (Staff Development)」と「教学 IR (Institutional Research)」

が重要視されている。FD・SD については、学修成果・教育成果の把握・可視化により得られた情報の共有、課題の分析、改善方策の立案等、実際に教育を改善する活動として位置付けた上で実施していく必要があると指摘されている。一方で教学 IR については、教学マネジメントの基礎となる情報を収集する上での基盤であり、学長をはじめとする学内の理解を促進するとともに、教学

IR を実施する上で必要となる制度の整備や人材の育成が必要であるとされている。「教学マネジメント指針」によれば、教学 IR の役割は、教学改革について正しい判断を行うために必要なデータを収集・分析し、目標達成に資する情報を提供すること、課題やその改善策を提案することにある。多くの大学で実施されている学生を対象としたアンケートの結果をはじめ、一人一人の学生の学修成果といった様々なデータを収集・分析する活動が、教学 IR には求められているといえる。教学 IR については、各大学で様々な取り組みがなされているところであるが、教学マネジメント指針で重要視されている FD において、教学 IR を活用した事例はあまり見られない。

そこで本稿では、山口大学で実施した教学 IR データを活用した FD について、実践内容とその評価を報告する。本報告を通じて、他の高等教育機関における教学 IR や FD の活動に資することを目指している。

## 2. 山口大学の FD の設計に至る背景

### 2.1 山口大学における体制

山口大学では、2020 年 4 月に教育開発と教学 IR の強化を目指すために、教育・学生支援機構内に教学マネジメント室を設置した。教学マネジメント室は、主に学修成果や教育成果に係る情報の把握や可視化、教育改善に係る活動、教学 IR

の推進を掲げている。教学マネジメント室の前組織にあたる大学教育センター（2002 年設置）において、FD や SD、IR の活動が行われてきた。例えば、全教職員を対象とする全学の FD・SD 研修会（年 1 回）や、教育改善を目的として学部と調整を行って内容を確定する教学改善 FD 研修会（年度により回数は異なる）などの研修、山口大学の教学に関する情報をまとめた Factbook の策定などである。2020 年の教学マネジメント室の設置時においては、これらの取り組みを引き継いだ。しかしながら、より教育の質の向上、データの活用を促進するためには、FD の内容や対象者の明確化、教学 IR データの共有や活用方法に課題があると考え、FD や教学 IR 活動の見直しを行うこととした。2022 年度からは、「教員対象の FD」「学生対象の TAD (Teaching Assistant Development)」「職員対象の SD」の 3 つに分類し、FD や SD の対象を明確化した上で体系的・系統的な仕組みに変更した（図 1）。例えば、「教育改善 FD 研修会」（図 1: 水色）は教員が対象、「全学 FD・SD 講演会」（図 1: 赤）は教員・学生・職員が対象、「TA・SA 研修会」（図 1: オレンジ）は学生が対象である。研修のテーマや内容は、対象者に応じたものとなっている。

教学 IR については、山口大学で実施されている様々なアンケートの把握と整理を行い、「教学マネジメント指針」に示されているように、学生

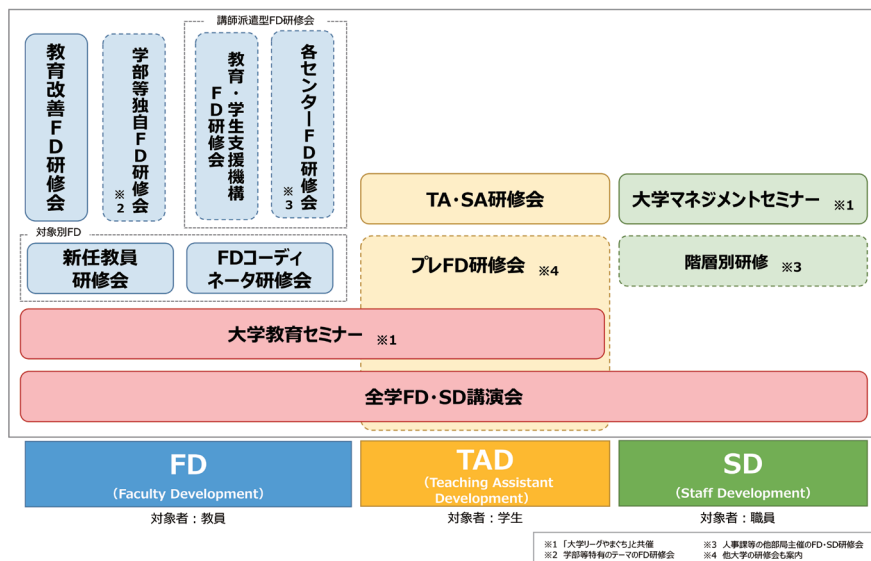


図 1 山口大学の研修概要 (2023 年度現在)

の学修実態や学修成果の把握，教育や学生生活の満足度，教育の改善を促すことが可能となるアンケートに改善した。この作業により，2022 年度からは，「①授業評価アンケート」「②教員自己評価アンケート」「③学修実態に関するアンケート（在学生調査）」「④学修成果に関するアンケート（卒業・修了時調査）」「⑤卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケート（卒業生・修了生調査）」「⑥山口大学出身者の就職先アンケート（企業調査）」の 6 つの調査を実施することとした。

これら 6 つのアンケートのうち，「⑤卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケート」は各学部個別に実施していたものを 2022 年度より教学マネジメント室で集約し実施しており，「③学修実態に関するアンケート」および「⑥山口大学出身者の就職先アンケート」は 2022 年度より新しく実施した調査である。また，「③学修実態に関するアンケート」から「⑥山口大学出身者の就職先アンケート」については，共通した設問を設けることによって，学生の成長や企業による卒業生・修了生の評価を検証できるようにした。それぞれのアンケートの対象者と実施時期は，表 1 のとおりである。このようにアンケートの見直しは行っ

たものの，これまでアンケートの調査結果は，報告書にまとめられ，一部の関係者にのみ周知される仕組みになっていた。そのため，アンケートの調査結果の活用が一部の教職員に限定されていたことや必要時にのみ教職員が閲覧するにとどまっていた。アンケートの調査結果の活用を促すための仕組み作りが必要な状況となっていた。

## 2.2 山口大学の FD と教学 IR の課題

FD や教学 IR については，これまで様々なプログラムの開発や研究がおこなわれてきた。一般的に FD に関しては，教員に必要な高等教育の情報や教授法等の内容が多く，2008 年からの義務化に伴い枠組みや設計，評価についての研究がなされてきた<sup>2,3)</sup>。一方で，教学 IR については，データの収集・蓄積のためのデータウェアハウスや収集したデータの分析方法，そのデータを扱う教職員の育成に関する内容が多い<sup>4,5)</sup>。また，授業評価アンケートを活用した授業改善の事例報告も多くある<sup>6,7)</sup>が，在学生を対象として実施されているアンケートなどの教学 IR データを共有し，教育改善や学修成果の検証・評価に結びつけた事例は少ない。

例えば，愛媛大学ではカリキュラム編成，教育内容および教授法の改善，教育効果の検証などの活動を促す「教育コーディネーター」を配置したり<sup>8)</sup>，学生の背景や大学教育の実態を共有するために「データから考える愛大授業改善」<sup>9)</sup>を発行したりしている。東京電機大学では，IR データを活用した教育改善の事例を Web で公開している<sup>10)</sup>。鳥居・山田<sup>11)</sup>は，教学 IR に焦点を当て，効果的かつ効率的な IR と FD の連動は，個々の大学に固有の文脈に即した実質的な教育改善にとって重要であると指摘している。

山口大学においても各学部・研究科で授業評価アンケートの情報を FD によって共有することで授業改善を促してきた。しかしながら，その他の学生から得られたアンケートのデータについては，FD として共有されたことはほとんどない。各種アンケートの調査結果を活用し，各学部・研究科がカリキュラムの改善や教育成果の評価による改善を行うためには，多くの教職員が関心を持つような教学 IR を活用した FD を設計する必要

表 1 山口大学の研修概要 (2023 年度現在)

	アンケート名	対象	実施時期
①	授業評価アンケート	当該科目の受講学生	科目終了時
②	教員自己評価アンケート	当該科目の担当教員	科目終了時
③	学修実態に関するアンケート	在学生 (最終学年を除く)	11月-12月
④	学修成果に関するアンケート	在学の最終年度	12月-3月
⑤	卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケート	卒業生 (卒業後 3 年)	8月
⑥	山口大学出身者の就職先アンケート	過去 5 年の就職先企業	10月 (3年に1回)

がある。そこで、各種アンケートの調査結果を FD によって共有することで様々な教職員の活用を促すように試みることにした。

### 2.3 山口大学の FD の設計

2.1 に示した通り、2022 年度以降、山口大学では、岩野<sup>12)</sup> や高森・岩崎・物部<sup>13)</sup> を参考に各種アンケートの調査結果を活用した FD を設計している。例えば、岩野<sup>12)</sup> は過去に明星学苑においてデータを活用した業務改善の SD 研修会を企画・実施したことを報告している。SD 研修会では、参加者の大学において得られた実際のデータを活用している。高森・岩崎・物部<sup>13)</sup> は、自大学の文脈に沿った FD を企画・運営していくことが重要になるとして、京都外国語大学等の FD 研修の事例を紹介している。これらの事例を踏まえると、自大学におけるデータを活用した FD を企画することが有効であると判断される。そこで、山口大学においても従来から実施されてきた教育改善を促すための FD である「教育改善 FD 研修会」（以下、FD 研修会）において、2022 年度に 1 回（全 2 回）「⑤卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケート」および「⑥山口大学出身者の就職先アンケート」の教学 IR データの集計結果を用いて実施した。FD 研修会では、教学マネジメント指針について概要を解説したのち、2 つのアンケートの実施目的と概要、結果を報告し、質疑応答を行った。参加者のアンケートからは、「今まで興味はなかったが興味を持った」「学生の実態が分かった」「もっと詳しく知りたい」といった声があり、一定の評価を受けることができた。この結果を受け、2023 年度からは、大学全体や各学部・研究科における教育改善を促すことを目的とした FD 研修会を全 3 回実施することとした。FD 研修会では、表 2 に示すように「③学修実態に関するアンケート」、「④学修成果に関するアンケート」、「⑤卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケート」の 3 つの教学 IR データを取り上げ、それぞれの分析結果を報告することとした。

本稿は、2023 年度に実施した第 1 回の FD 研修会の実践内容とその評価について考察したものである。第 1 回は、在大学生を対象に実施した「③学

表 2 2023 年度教育改善 FD 研修会の概要

	テーマ	時期	研修内容
第 1 回	山口大学の教学 IR - 2022 年度学修実態に関するアンケートに関する調査結果報告 -	7 月	2022 年 11-12 月に実施した在大学生（最終年度以外）向けアンケート調査の集計・分析結果の報告
第 2 回	山口大学の教学 IR - 2022 年度学修成果に関するアンケートに関する調査結果報告 -	10 月	2022 年 12 月-2023 年 3 月に実施した卒業・修了時の学生向けアンケート調査の集計・分析結果の報告
第 3 回	山口大学の教学 IR - 2023 年度卒業・修了後のキャリア形成に関する調査結果報告 -	11 月	2023 年 8 月に実施した卒業後 3 年以上経過した対象学年の卒業生・修了生向けアンケート調査の集計・分析結果の報告

修実態に関するアンケート」の分析結果を報告し、各学部・研究科の立場から教育改善の方向性について考えてもらう機会とした。

### 3. 教学 IR データの概要

今回の FD 研修会において、教学 IR データとして活用したアンケートは「③学修実態に関するアンケート」である。「③学修実態に関するアンケート」は、学部生（6,395 名）と大学院生（793 名）の在大学生を対象に 2022 年 11 月 4 日～12 月 23 日の期間に修学支援システム（Web）により実施した。アンケートの設問は、選択型設問と自由記述型設問があり、6 つのカテゴリー全 43 問で構成されている（表 3）。

表 3 学部生・大学院生への設問内容

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本情報（入試形態・志望順位） [2 問]</li> <li>・ 学習等の時間 [4 問]</li> <li>・ 授業内容 [6 問]</li> <li>・ 教育・施設等満足度 [15 問]</li> <li>・ 活動や学習成果等 [16 問]</li> <li>・ 自由記述（大学への意見・要望）</li> </ul>
---



回答数は、学部生が 1,776 名 (27.8%)、大学院生が 123 名 (15.5%) であった。回収率は学部生のほうが大学院生よりも高かったが、いずれも 3 割に満たないものであった。初めての調査であり、周知の方法や回収率向上に向けた対策は今後の課題である。また、文部科学省が実施する全国の大学生調査<sup>14)</sup>との重なりについても考える必要がある。学部生および大学院生の回答者の属性は、表 4 のとおりである。教学 IR データは、教学マネジメント室において、単純集計やクロス集計を基本とした分析を行った。

表 4 回答者の属性

学年(学部)	1 年 (42.6%), 2 年 (27.9%), 3 年 (26.2%), 4 年 (1.8%), 5 年 (1.5%)
性別(学部)	男性 (53.0%), 女性 (47.0%)
学年(大学院)	1 年 (74.0%), 2 年 (17.9%), 3 年 (8.1%)
性別(大学院)	男性 (65.0%), 女性 (35.0%)

※学部は 6 年制、大学院は 5 年制がある

アンケートの調査結果を伝えるだけでなく、参加者が次の行動に繋がられるような視点を組み込むようにした。これは単に結果を提示するだけでは、教育改善につながらないため、教職員にとって意味のある情報に変換することが重要である<sup>15)</sup>との指摘を踏まえたものである。例えば、「ディプロマ・ポリシーの理解度」の部分では、大学全体や各学部において理解度が芳しくない状況にあったことから、授業の初回時にディプロマ・ポリシーと授業科目との関連性を伝えるといったひとつの方法を提示した。

FD 研修会では説明時間を 35 分間、残りの 10 分間を参加者からの質疑・応答の時間とした。

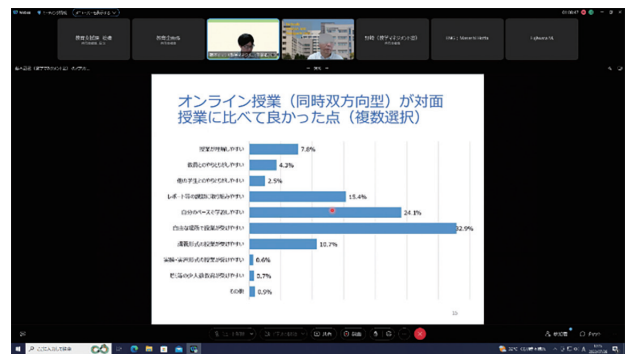


図 2 FD 研修会の様子

## 4. FD 研修会の概要

### 4.1 FD 研修会の内容

FD 研修会は、2023 年 7 月 26 日 (水) の 12:00 ~ 12:45 に Webex によるオンラインで実施した (図 2)。FD 研修会は、教学 IR データの分析結果を報告することによって、山口大学の全体的な学生の実態や山口大学の優れた点と課題点を共有することを目的とした。FD 研修会の参加者は、教職員合わせて 100 名であった。

FD 研修会では、「3. 教学 IR データの概要」で示した教学 IR データを用い、「授業時間外の学習時間」「オンライン授業（同時双方向型・オンデマンド型）の良い点と悪い点」「ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）の理解度」「山口大学に対する満足度」「在学中の活動や学習成果の修得度合い」「大学に対する意見や要望」の項目についての結果を伝えた。FD 研修会では、大学全体の状況を伝え、各学部の具体的な状況については、教学マネジメント室が作成した報告書を参照してもらうよう案内した。FD 研修会では、

### 4.2 FD 研修会に対するアンケートの概要

FD 研修会の評価を確認するために、研修終了後に参加者に対して、Moodle によるアンケートの回答を依頼した。アンケートの設問は表 5 のとおり、選択型設問 4 問、自由記述型設問 3 問の全 7 問で構成した。アンケートを実施した結果、有効回答数は 30 であった。

### 4.3 アンケートの結果

FD 研修会の参加者に実施したアンケートの各設問の結果は、次のとおりである。

FD 研修会の満足度については、設問 2 「FD 研修会の満足度を教えてください」において、「とても良かった」「良かった」「あまり良くなかった」「良くなかった」の 4 件法で尋ねた。その結果、参加者の肯定的評価は 83.3%（「とても良かった」+「良かった」）であった (図 3)。

表 5 アンケートの設問項目

設問 1	所属学部・研究科を教えてください。
設問 2	FD 研修会の満足度を教えてください。 選択肢：とても良かった / 良かった / あまり良くなかった / 良くなかった
設問 3	FD 研修会は授業の改善に活用できそうですか。 選択肢：とても活用できそう / 活用できそう / あまり活用できそうにない / 活用できそうにない
設問 4	FD 研修会は学生支援の改善に活用できそうですか。 選択肢：とても活用できそう / 活用できそう / あまり活用できそうにない / 活用できそうにない
設問 5	FD 研修会のよかった点を教えてください (自由記述)。
設問 6	FD 研修会の改善点を教えてください (自由記述)。
設問 7	FD 研修会に対する意見や要望を教えてください (自由記述)。

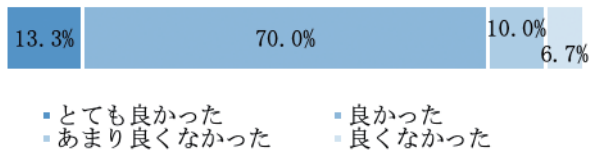


図 3 FD 研修会の満足度

参加者の授業改善への活用については、設問 3「FD 研修会は授業の改善に活用できそうですか」において、「とても活用できそう」「活用できそう」「あまり活用できそうにない」「活用できそうにない」の 4 件法で尋ねた。その結果、参加者の肯定的評価は 76.7%（「とても活用できそう」+「活用できそう」）であった（図 4）。

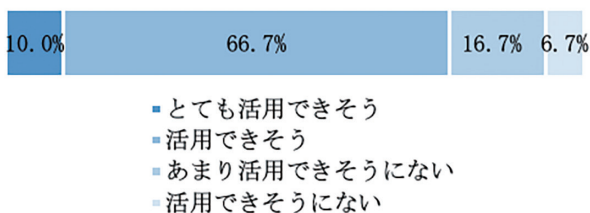


図 4 授業改善への活用

学生支援の改善への活用については、設問 4「FD 研修会は学生支援の改善に活用できそうですか」において、「とても活用できそう」「活用できそう」「あまり活用できそうにない」「活用できそうにない」の 4 件法で尋ねた。参加者の肯定的評価は 80%（「とても活用できそう」+「活用できそう」）であった（図 5）。

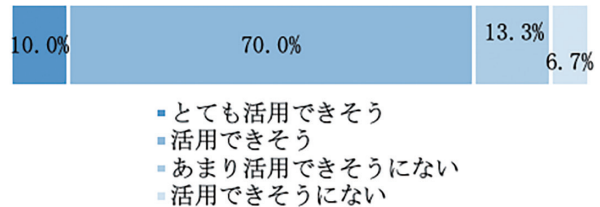


図 5 学生支援の改善

FD 研修会のよかった点については、設問 5「FD 研修会のよかった点を教えてください」の自由記述において確認した。自由記述は 10 件あり、それを 3 つのカテゴリーに分けた（表 6）。【結果が把握できた】には、「具体的な結果を聞いたので良かったです」などがあつた。【改善点が把握できた】には、「学生の学習時間の実態が知れたこと、DP の認知が低かったことなど、授業で改善すべきことを知ることができた」といった回答があつた。【学生の傾向が把握できた】には、「データ化され、見える化されているので、学生の傾向がわかりやすかつた」などがあつた。

表 6 よかつた点のカテゴリー別の回答

カテゴリー名	件数
結果が把握できた	6 件
改善点が把握できた	2 件
学生の傾向が把握できた	2 件

FD 研修会の改善点については、設問 6「FD 研修会の改善点を教えてください」の自由記述において確認した。自由記述は 6 件あり、それを 2 つのカテゴリーに分けた（表 7）。【FD の内容】には、「時間の制約もありますが、もう少し多面的な報告や可能性の示唆もあつてもよかつたと思います。（項目間の関係など）」などがあつた。【分析

方法】には、「山口大学の生き残りを図るためにも他大学との比較が重要なポイントだと考える」などが見られた。

表 7 改善点のカテゴリー別の回答

カテゴリー名	件数
FD の内容	4 件
分析方法	2 件

FD 研修会に対する意見や要望については、設問 7「FD 研修会に対する意見や要望を教えてください」において確認した。自由記述は 5 件あり、それを 3 つのカテゴリーに分けた (表 8)。**【FD の内容】**には、「仮にも「FD」と銘打つのであれば、改善方策をめぐって参加者のグループディスカッションなどを行うべきだと思う」などがあった。**【参加しやすい時間帯】**には、「お昼の時間で参加しやすかったです」、**【分析方法】**には、「質疑応答でも類似の要望が出ておりましたが、学部ごと・学年別の詳しい結果が知りたいです」があった。

表 8 意見や要望のカテゴリー別の回答

カテゴリー名	件数
FD の内容	3 件
参加しやすい時間帯	1 件
分析方法	1 件

## 5. 考察

### 5.1 FD 研修会の成果

ここでは、FD 研修会の参加者アンケートの結果をもとに、FD 研修会の成果を考察する。

#### 5.1.1 FD 研修会の満足度

FD 研修会の満足度については、設問 2 において、83.3% が肯定的評価であった。こうした結果が得られた背景としては、FD 研修会において参加者がメリットを感じていたためであると考えられる。設問 5 の自由記述のカテゴリーを確認すると、**【結果が把握できた】****【改善点が把握できた】****【学生の傾向が把握できた】**の 3 つがよかった点とし

て評価されている。FD 研修会において、データを可視化したことによって、学生の状況や傾向が具体的に確認できた点が影響しているものと考えられる。また、設問 7 の自由記述においては、**【参加しやすい時間帯】**のカテゴリーも見られ、FD 研修会が比較的参加しやすい昼の時間帯であったことも満足度を高める要因の 1 つになったものと考えられる。

#### 5.1.2 授業改善への活用

FD 研修会を通じた参加者の授業改善への活用については、設問 3 において、参加者の肯定的評価が 76.7% であった。設問 5 の自由記述には、この結果に影響していると推測される回答が見られる。**【改善点が把握できた】**のカテゴリーには、「学生の学習時間の実態が知れたこと、DP の認知が低かったことなど、授業で改善すべきことを知ることができた」「調査結果を聞いて、以下の点を知ることができてよかった。1) 全体的な傾向とも合致するが、〇〇学部学生はあまり授業時間外に勉強していないことがわかった。2) ディプロマ・ポリシーが知られていないので、DP と授業の関連を、授業開始時に話さなくてはならない」があった。参加者は、学部が掲げるディプロマ・ポリシーについての学生の認知度を踏まえ、授業とディプロマ・ポリシーとの関連性を学生に認識してもらう機会の必要性を挙げている。また、学生の授業時間外学習の実態が把握できたことによって、授業の改善をどのように行うかを考えるきっかけに繋がっていることも読み取れる。これらの結果は、教学 IR データを教職員にとって意味のある情報に変換し、FD 研修会で伝えることで参加者の行動を促した一例であると考えられる。

#### 5.1.3 学生支援の改善

学生支援の改善への活用については、設問 4 において、参加者の肯定的評価が 80% であった。自由記述からは、この結果に影響を与えていると考えられる回答が見られる。設問 5 の**【学生の傾向が把握できた】**のカテゴリーには、「データ化され、見える化されているので、学生の傾向がわかりやすかった」「学生が考えていることを数字

で示していただき、とてもわかりやすかったと思います」といった回答があった。参加者は、FD 研修会を通じ、学生の傾向が把握できたことによって、学生支援の改善につながる情報やヒントを得ていることが窺える。

## 5.2 FD 研修会の課題

ここまでは、アンケートの調査結果をもとに FD 研修会の成果の部分の考察してきた。一方、アンケートの調査結果からは、FD 研修会における課題も明らかになった。以下では、参加者の自由記述の回答を踏まえ、今後の FD 研修会の実施に向けた検討課題を示す。

### 5.2.1 FD 研修会の内容の見直しの必要性

FD 研修会については、肯定的な回答が見られる一方で自由記述を確認すると課題も読み取れる。設問 6 の自由記述における【FD の内容】の 카테고리には、「時間の制約もありますが、もう少し多面的な報告や可能性の示唆もあってもよかったですと思います。(項目間の関係など)」「大学として "FD" は教育学あるいは学術的な視点に基づき教員の資質をあげるために役に立つものにしてほしい」といった回答があった。FD 研修会において説明した内容は、教学 IR データを単純集計やクロス集計したものであった。参加者の誰もが理解できるよう複雑な分析を避けた内容や説明を行ったが、それが単純な報告や分析に見えた参加者もいるようである。次年度の FD 研修会では、単純集計やクロス集計といった基本的な情報を伝える部分と教学 IR データについて検定や多変量解析などの多面的な分析を行った結果を伝える部分の 2 つに分けて説明を実施する必要があると考える。

また、設問 7 の【FD の内容】の 카테고리には、「仮にも「FD」と銘打つのであれば、改善方をめぐって参加者のグループディスカッションなどを行うべきだと思う」といった回答も見られた。FD 研修会は、こちらの一方的な説明が 35 分間、残りの 10 分間が質疑・応答であった。参加者に対して、結果の共有を促すことはできた可能性があるものの、その結果を改善に結び付けるような

情報やヒントは十分に得られていない懸念もある。今回の FD 研修会では、参加者が次の行動に繋がられるような視点を組み込むようにしたが、十分でなかった部分があることが分かった。次年度の FD 研修会では、参加者同士が結果を活用し、議論する時間を設けるといった、改善に向けた次の行動が促せるような工夫が必要と考える。

### 5.2.2 各学部根付いた FD 研修会の必要性

設問 6 の【FD の内容】の 카테고리には、「やはり関係する学部のデータ、学年の違いについて知りたいが、今回はその詳細はみられなかった点。今後各学部での同テーマの FD を開催してほしい」といった回答が見られた。また、設問 7 の【分析方法】の 카테고리においても「質疑応答でも類似の要望が出ておりましたが、学部ごと・学年別の詳しい結果を知りたいです。資料として公表されるときで構いませんので、各学部にお知らせください」といった要望が見られた。今回の FD 研修会は、あくまでも山口大学の学生の全体像を理解してもらうことを前提にしていたことから、各学部・研究科の実態にはほとんど触れなかった。本年度の FD 研修会は、全教職員が参加できる仕組みで計画をしていることから、各学部・研究科に特化することは難しい。そこで次年度の FD 研修会では、各学部・研究科の実態を具体的に伝えられるよう、例えば各学部・研究科を対象とした研修を実施することも視野に入れていきたい。各学部・研究科に特化した FD 研修会を実施することによって、本年度の参加者の意見や要望が反映できるとともに、各学部・研究科の学生が回答したアンケートの結果を直接各学部・研究科に伝えることができる。そのため、より教育の改善につながりやすい FD が展開できるものと考えている。

## 6. まとめと今後の展望

本稿では、山口大学のこれまでの FD の実態を踏まえつつ、本年度から新たにはじめた FD 研修会の一つに焦点を当て、実践内容と参加者からの評価をもとに成果と課題を報告した。これまでの FD 研修会の参加者は、2021 年度までの平均が 35



名程度, 2022 年度が 65 名であったが, 今回の FD 研修会は 100 名となり, 多くの教職員から注目されたことが窺える。

FD 研修会の成果としては, 参加者のアンケートの回収率の低さに課題は残るものの, 寄せられた回答からは肯定的な意見が得られた。一方で, 課題も見つかった。FD 研修会においては, 多面的な分析・報告, 参加者同士の議論の必要性といった研修内容の改善が必要であることが分かった。とりわけ今回の FD 研修会では, 各学部・研究科といった個別の内容をほとんど扱うことなく, 山口大学における学生の全体像について教職員に理解を促すことに主眼をおいた。そのため, 参加者のアンケートの回答からは, 各学部・研究科のより詳細なデータ分析やその報告を望む声が多く聞かれた。そこで, 次年度以降は各学部・研究科の実態を具体的に伝えられるよう, 詳細な分析・報告を行うとともに, 各学部・研究科に特化した FD 研修会を実施していくことで, より効果的・効率的な教学 IR と FD との連動を実現していきたいと考える。

今後は, 各学部・研究科のニーズにもとづいた教学 IR や FD を展開していくための方法を各所属教職員 (各学部の FD を司る FD コーディネーターなど) とともに検討していくことで, 山口大学の教育改善をより促していきたい。

## 参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会 (2020) 『「教学マネジメント指針」(令和 2 年 1 月 22 日大学分科会)』 ([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360\\_00001.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00001.html)) (最終アクセス: 2023 年 10 月 24 日)
- 2) 夏目達也 (2011) 「大学教育の質保証方策としての FD の可能性—FD の新たな展開の諸相—」『名古屋高等教育研究』11, 133-152.
- 3) 松下佳代 (2007) 「「FD のダイナミックス」の方法と展望」『大学教育学会誌』29 (1), 4-10.
- 4) 小林雅之・山田礼子 (2016) 『大学の IR 意思決定支援のための情報収集と分析』慶應義塾大学出版会株式会社.
- 5) 小湊卓夫・嶋田敏行 (2015) 「IR その着実な一歩のために: 第 2 回担当者に求められるのは高度な分析力か?」『Between2015 年 6-7 月号』262, 25-27.
- 6) 安岡高志 (2007) 「学生による授業評価の進展を探る」『京都大学高等教育研究』13, 73-87.
- 7) 大学高等教育開発推進センター (2010) 『学生による授業評価の現在』東北大学出版会.
- 8) 愛媛大学『特色のある取組』 (<https://www.ehime-u.ac.jp/education/efforts/>) (最終アクセス: 2023 年 12 月 30 日)
- 9) 愛媛大学教育企画室『教学 IR』 (<https://web.opar.ehime-u.ac.jp/about/ir/>) (最終アクセス: 2023 年 12 月 30 日)
- 10) 東京電機大学『IR データ活用による教学改善の事例紹介』 ([https://www.dendai.ac.jp/about/tdu/activities/oed/07IR\\_index.html](https://www.dendai.ac.jp/about/tdu/activities/oed/07IR_index.html)) (最終アクセス: 2023 年 12 月 30 日)
- 11) 鳥居朋子・山田剛史 (2010) 「内部質保証システム構築に向けた教学 IR と FD の連動」『大学教育学会誌』32 (2), 39-42
- 12) 岩野摩耶 (2021) 「IR を活用できる大学・学校職員の能力開発プログラム—統合型 IR から分散型 IR へ—」『京都大学高等教育研究』27, 25-36.
- 13) 高森智嗣・岩崎千晶・物部剛 (2017) 『自大学の文脈を踏まえた FD の企画・運営』公益財団法人大学コンソーシアム京都第 22 回 FD フォーラム.
- 14) 文部科学省『全国学生調査』 ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/chousa/1421136.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/chousa/1421136.htm)) (最終アクセス: 2023 年 12 月 20 日)
- 15) 竹中喜一 (2023) 『学習成果の評価』玉川大学出版部.

